

言語変異理論再考

—「相関主義」という誤解と説明能力—

高野 照 司

言語変異理論再考

——「相関主義」という誤解と説明能力——⁽¹⁾

高野 照 司

目 次

1. はじめに
2. 変異理論における「言語能力」
3. 「言語能力」解明への変異理論的アプローチ
4. 言語変異理論—近年の展開
5. おわりに

1. はじめに

「社会言語学に理論はない」などという批判をこれまでしばしば耳にすることがあった。社会言語学的研究の多くは、様々な言語事象を何らかの社会的要因との関連で記述する作業の域を超えておらず、「予測」や「説明」能力を成立要件とする理論の研磨・進歩には貢献できていないという批判である。とりわけ1960年代以降活発化したことばの変異や変化を扱う数量社会言語学 (quantitative sociolinguistics) は、分析対象となる言語変項 (variable) の使用頻度と社会的変数との規則的關係を記述するだけの相関主義的枠組みから脱却しきれないものとして、未だにこうした批判の矢面に立っている (Milroy, 1987; 渋谷2002)。

本論考では、1960年代以降、Labovによる一連の数量社会言語学的研究を土台に構築された「変異理論」(Variation Theory) の理論的枠組みとその分析アプローチを詳説した上

で、当該理論の近年の展開を概観しながら、上記批判への反論を試みる。はじめに、敢えて原点に遡り、変異理論が定めた「言語能力」に関して、特に生成文法理論との対比を交えて概説する。次に、変異理論の心臓部とも言える分析アプローチの解説では、特に当該理論の予測・説明能力に焦点を当てる。最後に、エスノグラフィーや社会心理学等の隣接分野との連携による生産性を中心に、特に言語外的変数を巡る当該理論の近年の進化の意義を考察する。

2. 変異理論における「言語能力」

生成文法理論登場以降の言語学において、その研究対象は母語話者の持つ均質な「知識」とされ、そこから派生する実際の発話行為については、社会的要因を含めた様々な言語外変数の影響下で不安定かつ誤用を含んだ些末的資料を提供するに過ぎないとして、分析対象から除外されてきた (Chomsky, 1965)。しかし一方で、人間の言語能力に関するこの「Competence-Performance」の分割論は、「言語能力」の狭義すぎる解釈 (Hymes, 1974)、母語話者の知識や直観の均質性という大前提への反証 (Labov, 1972b)、規範偏重の内省と実際の言語運用との較差 (Sankoff, 1988; Wolfson et al., 1989)などを根拠に、言語の現実性・社会的特性をより反映させた言語理論の構築を唱える言語学者たちによって批判

キーワード：言語変異論，社会言語学，秩序ある変異性，VARBRULプログラム

的となってきた。

変異理論はこの後者の理論的スタンスを発展させるかたちで、日常生活における意思伝達の媒体として活用される言語を、できるだけ自然なありのままの姿で捉えることにより、人間の言語能力の解明へ迫ろうという帰納的アプローチをとる。実際の言語運用を観察した場合、研究者は話者ごとに多様な異形の出現に面食らう。生成文法学者であれば、この現実を言語運用には付き物の自由変異とみなし、言語研究にとっては外的な資料として掃き捨てるであろう。しかし、変異理論においては、現実の言語運用に観察される多様さの中に、それを有限的に支配・拘束する秩序 (orderly heterogeneity) が存在することを母語話者が「知識」として獲得し、その秩序に則って言語を自在に操るまでを「言語能力」と考える (Weinreich et al., 1968; Labov, 1969, 1972 a)。従って変異理論は、母語話者の「言語能力」の解明を目標とするという意味においては、生成文法と何ら変わりはない。しかしながら、変異理論においての「言語能力」とは、純粋に言語規則の内在化のみならず、言語運用を取り巻く様々な社会文化的・脈絡的情報に基づいた母語話者の無意識的 (時に意識的) 判断により、その規則を適切に (時に方略的に) 使いこなすことのできる能動的な能力を意味する。

それでは、このようにダイナミックな「言語能力」解明の鍵を、変異理論は具体的にどこに求めるのだろうか。現代言語学の礎となったソシュールの *Langue-Parole* の分類は、生成文法理論と同様に、変異理論においてもまた息づいていると言える。生成文法は「言語能力」の在処を *Langue* と捉え、その解明の鍵を逸脱に満ちた発話行為 (*Parole*) 自体ではなく、母語話者の均質な「認知」に求めた。それとは対照的に、変異理論における言語能力の在処としての *Langue* は、母語話者が所属する言語共同体の規範体系 (=言語共

同体文法) であるとし、様々な社会的背景を持つ話者個々人の *Parole* の総体がこの体系を作り上げると考える (Weinreich et al., 1968)。故に、「言語能力」は必然的に社会的産物であり、先天的に社会的次元を備えた可変的能力だと言える。さらには、同一言語共同体内においても、ある特定の社会的特徴・規範を共有する *Parole* の集合体は副次的集団 (subgroup) を形成し、その集団特有の文法を築く。現実の言語運用に観察される表向きは混沌とした多様性の中に一定の秩序が内在するという変異理論的発見は、人間の言語能力のこうした可変性・複合性の反映である。母語話者が共有する言語的直観や洞察を通して言語能力の解明を目指す生成文法の認知的アプローチは、意志伝達の媒体としての言語本来の役割・機能に付随する様々な「異分子」をできるだけ排除し効率よく事の核心に迫ろうという還元主義に立脚している。それとは対照的に変異理論は、実際の言語運用に観察される言語の社会的・脈絡的特性を言語能力の一部と捉え、言語内的構造と多様な言語外的変数との相互作用を包括的に説明するアプローチをとる。

3. 「言語能力」解明への変異理論的アプローチ

3.1. 発見ツールとしての変異規則 (Variable Rule) 分析

変異理論では、上記のような「内在的可変性」 (inherent variability) を備えた言語能力を「Variable Rule」 (以下、VR と略す) と呼ばれる変異規則で記述する (Labov, 1969)。これは従来の範疇規則 (categorical rules) と随意規則 (optional rules) のみによっては記述不可能な言語の漸次的変異性を、様々な拘束要因の相対的影響力を階層的に捉えることによって、秩序ある可変性を有する言語能力の記述に成功した。即ち、VR により、それ

までは無秩序・分析不可能として無視されてきた言語運用上の変異性を、規則体系として言語能力の一部に統合したわけである。VRは、その後、言語運用上の頻度を基に算出される「蓋然性指数」(probability index)を用いて、変異メカニズムを予測する(即ち、変異を内包する言語能力を記述する)統計学的モデルへと進化し(Cedergren & Sankoff, 1973; Guy, 1975; Rousseau & Sankoff, 1978ab; Sankoff & Labov, 1979), 幾たびかの改良によって言語変異研究者にとっての有効な「発見ツール」として今日も広く汎用されている(Guy, 1987; Pintzuk, 1988; Rousseau, 1989; Rand & Sankoff, 1990; Young & Bayley, 1996)。

変異理論的アプローチにおいて、VR分析の果たす役割は大きい。その第一は、分析対象となる変項とそれに関与する要因の出現頻度を基にはじき出された「蓋然性指数」による高度な予測能力にある(Guy, 1987; Preston, 1989)。ある変項(例えば、英語における語末 t/d 消去)が、ある特定の言語内的構造(例えば、後続する音素が母音か子音か)や社会脈絡的環境(例えば、話者の社会階層・人種、発話スタイル)の下で示すであろう変異パターンを、実際の発話資料を基に予測する(Cedergren & Sankoff, 1973)。

VR分析によるこうした予測の妥当性は、言語の普遍性に基づいた諸法則によって導かれる予測と合致するという点において実証済みである。例えば、アメリカ英語話者のインタビュー談話に観察される語末 t/d 消去の規則的変異を研究した Guy (1991) は、VR分析の結果得られた蓋然性指数の階層的パターン(例えば、単一形態素語彙 > 不規則動詞過去形 > 規則動詞過去形の順に消去指数が低くなる)が、語彙音韻論(Lexical Phonology)の消去規則への複数回適用を含んだ語彙派生プロセスの違いによって正確に算出されることを経験的に立証している。また、同様の変異事象を扱った Guy & Boberg (1997) は、

同類の音韻素性の連続を避けるという言語普遍的な Obligatory Contour 法則に基づいた説明を与え、語末の二音素連続のうち、第一音素目と第二音素目(t/d)が共有する音韻素性の数の違いによって、t/dの消去率が階層的に決定され、その率はVR分析によって示される蓋然性指数とほぼ一致することを証明した。

VR分析のさらに重要な側面として、言語変異の規則性を支配する複数の拘束要因(constraints)間の相対的効果(relative effectiveness)を盛り込んだ説明を提示できることが挙げられる。ある変項の「ゆれ」を説明する場合、変異理論的アプローチでは、まずその「ゆれ」(例えば、ガ行子音の破裂音化または鼻音化変異)を左右する拘束要因は何であるのかについての仮説を立て、言語運用データをもとにその仮説を検証する(図1参照)。一般に、ある「ゆれ」を支配する拘束要因が一つであることは稀で、言語内的要因(「語の出自」他、4種類の要因群[左縦軸])と、社会的要因(「話者年齢」「話者出生・生育地」)やスタイル的要因(「発話スタイル」)などの言語外的要因が発話の瞬間ごとに一齐に当該変項の産出に作用し、互いに競合し合って最終的に「ゆれ」の度合いが決定される仕組みになっている。

このように複雑に絡み合った多数の拘束要因間の相対的影響力を、各要因ごとに未処理の頻度で精密に示すことは極めて困難である。従って、ここでも当該変項の「ゆれ」に対する拘束要因間の相対的効果を勘案して算出した「蓋然性指数」を用いて、各拘束要因が他要因と比べてどの程度の影響力を発揮するのかを予測し、その社会言語学的解釈を求めていくという分析プロセスを経る(Sankoff, 1985, 1986; Young & Bayley, 1996)。また、アンケート調査等の制限的な資料採集タスクとは違い、できるだけ自然に近く人工的制約の少ない環境で採集された言語運用資料には、

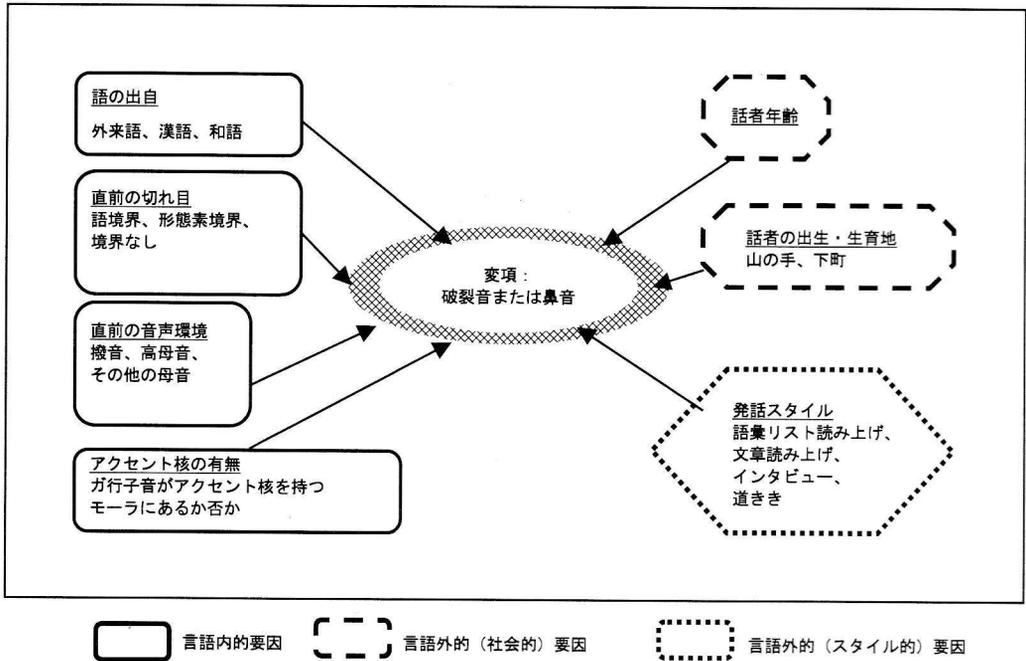


図1：日本語東京方言におけるガ行子音バリエーションへの変異理論的アプローチ

(筆者によるHibiya 1988の図示)

採集方法上のバイアス、分析対象の変項やその影響要因の頻度的不均衡などの問題が付き物である (Sankoff, 1985)。こうした問題への対応策としても、頻度そのものを未処理で用いるのではなく、それに基づいた「蓋然性指数」を算出することが賢明とされている (Guy, 1981; Sankoff, 1985; Young & Bayley, 1996)。

過去に行われた言語変異の社会言語学的研究において、特に社会的変数 (例えば、話者のジェンダー) を問題にした研究の大半は、このような同時発生的拘束要因の相対的影響力を勘案した変異の解釈を行っておらず、言語変項と社会的変数の一対一の相関を実頻度に基づいて議論するに留まっている。これまでの解説からも明らかなように、ある社会的変数が真に「ゆれ」を拘束する要因であると結論づけるには、競合する他拘束要因の貢献度の把握は不可欠であり、このような一元的相関を求める方法論は多層的な変異構造の解

明には不的確なものと言える。さらには、統計学的手法を全く用いることなく、変項の実頻度のみに基づいた結論づけは、言語運用資料には避けられないバイアスにより、しばしばある社会集団に関する過剰一般化を導きかねないとも言える (Takano, 1998, 2000)。

これまで概観した研究成果から導かれるVR分析の総括的意義として、第一に、言語運用データを基にした帰納的アプローチによって言語能力 (文法) を解明していること、第二に、従来の範疇的な規則体系では説明しきれない話者による言語規則の漸次的かつ規則的適用を経験的に検証することで、言語能力の可変性を証明していること、最後に、生成文法的解釈における抽象的「言語能力」と実際の「言語運用」の溝を撤廃することで言語理論全般の研磨に貢献していることなどが挙げられよう。

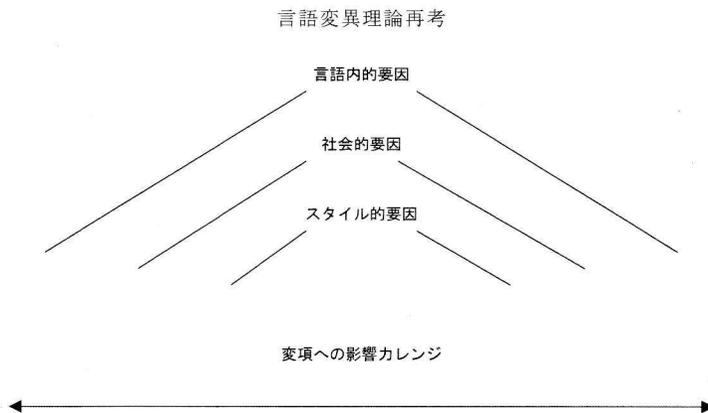


図2：拘束要因ヒエラルキー

3.2. 拘束要因ヒエラルキー

英・米語に加え、様々な言語に跨るこれまでの研究成果の蓄積から、言語変項への影響力という意味で、各種拘束要因間には一定のヒエラルキーが普遍的に成立することが明らかとなった (Bell, 1984; Preston, 1991)。図2のように、いかなる言語変異事象においても、言語内的要因 (図1における左縦軸要因群) が最も強い影響力を行使する。その影響力の範囲内で話者属性などの社会的要因が作用し、さらにその傘下でスタイル的要因が最も弱い影響力を持つという階層的な相互関係が存在する。このような普遍的な法則性により、いかなる言語共同体の変異事象もその構造に関する一定の予測が予め成り立つことになる。さらには、この法則性を言語変異研究の大前提と捉えることで、今後の研究成果の信憑性を検証する尺度となり得るし、逸脱する分析結果が得られた場合には、その逸脱の理由を求める考察をさらに進めていく機会を研究者に与えてくれる (Rickford & McNair-Knox, 1994)。

以上のことから、言語内的要因の果たす役割は重大であり、言語変異・変化のメカニズムを的確に把握・説明するためには、その分析は不可欠であることが分かる。数多い影響要因の中から、例えば、社会的要因である「話者属性」だけを捉えて、言語変項 (例えば、「ガ行子音の破裂音化/鼻音化」) との頻度的相関を理解するだけでは、当該変項が示す

社会言語学的変異およびそれを統括する言語能力の全体像を把握するという目標からはほど遠い。数量社会言語学が「相関を論じているに過ぎない」とする批判の多くは、こうした多層の変異構造の解明という変異理論本来の理論的枠組みを認識することなく、性別や社会階層など話者属性との相関だけに目を向けてよしとするかのような一面的理解から派生するものであろう。また一方で、言語運用における社会的変数 (例えば、性差) や語用論的側面を扱う言語研究も、こうした拘束要因間の普遍的な法則性を踏まえれば、言語内的要因の果たす役割の重要性を再認識した考察が必要とされるであろう (Takano, 1998, 2000)。

3.3. 集団主義的アプローチの妥当性

社会的産物としての「言語能力」を解明するために、変異理論は計量的手段を活用した社会学的アプローチをとる。研究対象となる言語共同体にフィールドワーカーとして入り、年齢、性別、社会階層、人種等からなる社会属性グリッドを平均的に埋めるように話者を無作為抽出し、各話者から日常語 (vernacular) をふんだんに採集する。この被験者集団は当該言語共同体の標本群として、成員を代表する言語資料を提供すると考える。しかしながら、このように個々人の言語運用をつぶさに観察・記述するよりも、多数の語

者による言語行為をひとまとめにし、そこに観察される総体的パターンをマクロ的視点から分析する集団主義的アプローチは、個々の話者の特異性や言語運用脈絡との相互作用的側面をないがしろにしているとして、言語運用の質的分析に重きを置く言語学者からの批判が多い。また、同じ言語変異を扱う研究者からも、こうしたスタンスに対する異論が唱えられ、例えば、様々な社会的背景を持つ話者成員が、その所属する言語共同体規範(共同体文法)を遵守しつつ可変的かつ規則的に言語運用を行うという前提が立証されていないこと、個人語自体の文法の実態が明らかにされないまま共同体文法を記述する試みの無意味さ、などが指摘されてきた(Bickerton, 1971)。

これらの批判を受け、アメリカ英語における語末 /d 消去の変異を研究した Guy (1980) は、集団主義的アプローチの妥当性を裏付ける経験的証拠を提示している。18名の米語母語話者を被験者として、VR 分析により得られた各被験者の変異パターンと被験者集団全体が示す変異パターンとの較差を質的に検証した。その結果、大多数の被験者において個人の変異パターンと集団の変異パターンが一致しており、幾人かの被験者において見られた不整合の原因は、データ量の不足(具体的には、分析対象変項に対する影響要因グリッドの1マスに対し分析用トークンの個数が10以下)にあることが判明した。さらには、要因グリッドの1マスにつき最低30の分析用トークンを得ることで信頼性のある結果、即ち、個人変異と集団変異が整合する結果が得られると結論づけている。

こうした研究成果は、変異理論がその大前提とする「言語共同体文法」の存在を立証するものであり、同一共同体(または副次的社会集団)に属する母語話者は同一の文法的規範に基づいた可変的言語能力を共有している証である。集団としての言語運用に現れる変

異構造を土台に、潤沢な発話資料を採集し系統立った分析をする変異理論的アプローチは、母語話者個人々の持つ可変的な言語能力の解明へと直接的に繋がる試みであることが経験的に立証されたわけである。それとは対照的に、集団としての言語行為パターンを大雑把な上面資料として度外視し少数の個人語のみを扱う方法論は、分析資料自体の特異性や研究者の主観といった「一般化」(generalization)の信憑性を損なう諸因子を排除する術を持ち合わせていないと言える。

4. 言語変異理論—近年の展開

1960年代以降の変異理論全般の進化において特に注目すべき展開は、「言語外的変数」(社会的要因やスタイル的要因)の扱いを巡る活発な議論である。前節で解説したように言語変異における「言語内的要因」の果たす役割・重要性については、ほとんどの研究者間でコンセンサスが得られていると言っても過言ではない。しかし、社会的産物としての言語能力の規則的可変性を解明する際に、その社会的次元を支配する「社会的・脈絡的変数」(例えば、図1の右縦軸要因群)をどのように定義し事象説明の根拠とするかについての統一的な見解は今日でも得られておらず、変異理論のさらなる進歩のためには避けて通れない重要な懸案事項である。言語変異研究が「相関主義」と批判される所以も、主にはこの言語外的変数に纏わる方法論の不熟と古典的研究成果に対する一面的評価から生まれたものではないかと思われる。そこで本節では、言語外的変数を巡る特に近年の研究成果を概観しながら、今日までの進化の系譜を辿る。その際に、ある変異・変化がそもそも何故起こるのかという変異理論の究極的謎(actuation riddle) (Weinreich et al., 1968:186)への解答を中心に、言語変異理論の説明能力と今後の方向性を考察する。

4.1. 社会的変数の「動的」解釈

変異理論の礎となった古典的研究 (Labov, 1966; Trudgill, 1974; Wolfram & Fasold, 1974等) では、極めて「静的」な尺度によって話者属性 (例えば、社会階層や性別) を捉える方法論が主流であった。例えば、社会階層集団は、家父長の職業・学歴・年収・住居形態等の数値化によって決定され、性集団に関しても、生物学的性を根拠に被験者は自動的に男女どちらかの集団にまとめられた。やがてこうした尺度による話者属性 (および副次的社会集団) 決定の画一的方法論が厳しく批判されるようになり (Delphy, 1981; Llewellyn, 1981; Cameron, 1985), 研究対象となる言語共同体特有の地域性や話者個人の人社会生活に目を向ける「質的な」尺度や「集団内的」多様性を重視する研究の必要性が唱えられた (Coates & Cameron, 1988; Graddol & Swann, 1989; Eckert & McConnell-Ginet, 1992)。さらには、話者属性の指数化によって機械的に副次的社会集団を決定するマクロ的方法論では、現実の言語運用に観察される「集団内的」可変性を過度に単純化してしまうばかりでなく、何故ある社会集団が一様にある特定の変異パターンを示すのか、何故ある特定の話者だけが所属する社会集団全体の変異パターンを逸脱するのか、何故ある特定の社会集団が変化を進めるのかなど、言語変異・変化の社会的動機を説明することは難しい。

このような動きを捉えた先駆的な研究は、カナダ・モントリオール市におけるフランス語変異を研究した Sankoff & Laberge (1978) である。上述の古典的研究が一様に採用してきた社会階層の構造主義的定義では当該言語変異の起因を説明することは不可能であり、共同体成員の日常的経済活動やそこから派生する連帯・協調意識が、社会階層を形作る最も有力な動機付けであるとした (linguistic market)。当該変異の社会分布は社会階層などという抽象的概念によって説明がつくので

はなく、具体的「職業」に付随して成員が抱く地域特有の言語イデオロギーが、特定の職業活動で求められる言語運用上の「標準性」(standardness) の度合いを決め、当該変異の秩序ある社会分布が形成されることを立証した (Sankoff, et al., 1989)。同様に、漠然とした階層所属意識よりも具体的経済活動とリンクした言語のイデオロギー性に着目した研究も現れた。地域社会における社会経済活動を通して培われた話者個人の人言語イデオロギーが、英語群動詞における不変化詞 (particle) の後置や補文標識 that の省略といった非標準的運用の程度を決定するという変異の起因解釈がなされたり (Kroch & Small, 1978), 話者の職業に付随する社会的威信が談話上の明示性 (explicitness) の程度を左右する (Coupland, 1983) などの社会的解釈が加えられた。さらには、ガイアナ・クレオール語の言語共同体を研究した Rickford (1986) は、従来の欧米的階層概念を脱却し、商人・職人から成る支配層、プランテーション労働者から成る下位層などの職業を基本とした地域特有の階級イデオロギーを通して、当該社会構造を洞察する必要性を唱えている。

一方、性集団をどのように定義し分析に組み込むかに纏わる問題は、社会的変数を巡る今日までの議論の中で、最も生産的な成果が得られた分野であろう。近年の性差への言語変異理論的アプローチは、個々の被験者の社会生活に密着した綿密な言語共同体調査を通して、言語変異・変化の社会的起因の説明を重視する民族誌学的方法論の吸収へと進化してきたと言える (Douglas-Cowie, 1978; Nichols, 1980, 1983, 1984; Bortoni-Ricardo, 1985; Thomas, 1988)。その中でも特に Milroy (1980) による「社会関係網理論」(Social Network Theory) は、変異理論に民族誌学的方法論を統合し理論化するという新次元を切り開き、その後の変異理論の進歩に多大なる貢献をした。

Milroy は長期参与観察法 (participant observation) による調査を行い、研究対象となる言語共同体 (北アイルランド・ベルファスト市) の疑似成員として被験者と多くの生活場面を共にしながら、当該共同体内の地域的特性、市内の各地域における就労状況や社会移動、それに関連する被験者の社会生活・人脈・社会的アイデンティティーなどローカルな視点から共同体や被験者に関する質的知見を得た。それらを基に各被験者の人脈の「密度」(density) と「複合性」(multiplexity) からなる「社会関係網指数」を割り出し、当該共同体で観察される言語変異の説明に役立てる手法をとった。こうした包括的な分析の結果、話者の性別に関係なく、密度が濃く複合的な地元志向の社会関係網を築いている話者が土着語維持や誇示に向けての駆動力となり、逆にその社会関係網の辺境的地位にいる話者は、土着語維持の社会的プレッシャーを受けることなく、他共同体変種とのパイプ役として新種を導入する役割を果たすことなどが判明した。その後、辺境話者との定期的接触を持つ地元社会網の中核的話者によりその新参変項は共同体全体へと広められるが (Milroy & Milroy, 1985)、ベルファスト市内のある地域で当時進行中の土着語志向の言語変化はこのようなメカニズムを経て、男性話者によってではなく、地元に関わりが強い社会関係網に生きる女性話者によって推し進められていたことも判明した。Milroy によるこうした研究成果は、上述の古典的研究によって一般化されてきた「社会言語学的性差パターン」(女性の顕在的威信・標準変種志向性、男性の潜在的威信・非標準変種志向性) (Fasold, 1990) を覆す経験的実証として、「性」という社会的変数の流動性や地域性を重視する大きな潮流を生み出していく端緒となったと言える。⁽²⁾

今日までの変異理論の進化の過程において、「社会的変数」の最も先進的解釈・定義を読

み取れる場合は、これまで概説してきた数々の革新的研究の総括とも言える「社会実践理論」であろう (Eckert & McConnell-Ginet, 1992; Eckert, 2000)。当該理論は、地域社会に根ざした話者個人的生活体験やそれを通して獲得される社会的地位・アイデンティティーなど、様々な実生活要因が複合的に絡み合う「動的」な社会構築概念として「社会的変数」を捉え直すスタンスをとる。即ち、社会実践理論における社会集団とは、社会学的指数によって定める顔の見えない抽象的集合体ではなく、類似の社会文化活動・信条・価値観および言語運用を共有する成員たちが自発的に創造し時に変革していく自己実現の場であると言える (community of practice)。社会実践理論的アプローチでは、地域社会における各被験者の社会生活の詳細な観察によって、一人の被験者が幾つもの「顔」(アイデンティティー) を築き上げながら同時に複数の社会集団に所属し、言語運用を通して自己実現をはかっている実態が浮き彫りになる。各社会集団内において、ある特定の言語変項は社会的意味を与えられ、集団または自己のアイデンティティーの発露として誇示・強化されていくのである。

Eckert (1988, 1991) は、社会的変数をこのような具体的社会実践に基づいた「社会的カテゴリー」(social categories) として捉え直すことで、言語変化のメカニズムやその変化の社会的動機を明らかにした。ミシガン州デトロイト地区にある高校での長期的参与観察を経て、Northern Cities Chain Shift と呼ばれ当時進行中とされていた母音変項 (uh) (例えば, but における母音) の後方化と下降化や多重否定の流布とその社会的意義を分析した。その結果、学校生活中心の保守的価値観で社会生活を営む高校生集団 (Jocks) と学校が求める価値観には背を向け地元のストリート文化に生活基盤を置く高校生集団 (Burnouts) とでは、当該変化への参与形態

が異なることが判明した。Burnouts はデトロイト市中心部から伝播するこの汚辱の言語変化に、屈強さや大都市ストリート文化との絆などの社会的価値を見出し、集団帰属と自己アイデンティティーの実践手段として積極的に当該変化を推し進めていた。それとは対照的に Jocks は、地域社会の保守的価値観に迎合するイデオロギーから当該変化への参与を避けながらも、一方では Burnouts との識別化と集団独自のアイデンティティーの構築という社会実践として、異なる母音異音を積極的に採用している事実も明らかとなった。さらに、これらの変異・変化のメカニズムは、話者の性別や親の社会階層指数によっては予測がつかないことも同時に立証されている。

上記の研究成果から、言語変異・変化のメカニズムが、話者の社会階層指数や性別等で画一的に決定される「便宜的」社会集団との相関によっては説明のつかないものであり、職業的活動やそれと関連する言語イデオロギー、服装・髪型の嗜好や趣味・私的諸活動等と同等に、個々の話者が日々の生活の中で遂行する多重複合的な社会実践によって初めての確かな説明が与えられることが分かる。社会的変数をこのような具体的社会実践に基づいた動的概念として捉え直すことで、言語変異のメカニズムやその変化の社会的動機を説明する理論的枠組みが変異理論に備わりつつある。

4.2. 発話スタイル：理論化への模索

言語変異・変化研究の歴史において、言語変項と発話スタイルとの規則的相関は多くの言語共同体で古くから確認されてきた変異理論の普遍的法則である。同一の言語共同体に属する成員は皆この法則性を言語能力の一部として獲得しており、言語運用に観察されるスタイルの変異は、その言語共同体に根付いている規範意識の頭れとして、言語変化の起因や動向を知る重要な資料となる (Labov, 1972a)。変異理論において、Labov (1966)

以降、スタイルは話者本人が自己の発話に向ける注意の度合いとして極めて狭義的な解釈が与えられており、今日でもなお多くの研究者によって無条件に踏襲されている。

しかし一方で、変異理論における近年の展開の中で、発話スタイルが本来有する発見的リソースとしての豊かさを指摘する研究が増え、発話スタイルの再解釈、スタイルとレジスターの弁別や統合、言語変異・変化における発話スタイルの自立的役割などを巡る本格的な議論が芽生え始めている (Biber & Finegan, 1994; Eckert & Rickford, 2001)。従来の古典的解釈においては、発話スタイルを分析する意義が社会的威信やそれと関連する変化の方向性を探る程度のことに限定されてしまっており、現実の言語生活の中でそもそも発話スタイルがなぜ生じるのか、その社会的意味は何なのか、そして最終的には、言語変異・変化の包括的パラダイムの中にどのように埋め込まれるべきなのか等の疑問への答えを得ることは難しい。また、各種拘束要因間の序列的關係が示すように (図2)、発話スタイルは変項の「ゆれ」に対して比較的軽微な影響力を持つ言語外的要因に過ぎないとして、大多数の変異理論的研究においてはその周辺の役割に久しく留まってきたと言える。

とりわけ1980年代以降、Bell (1984) による「オーディエンス・デザイン理論」を発端に、言語変異・変化の説明プログラムに発話スタイルを積極的に取り込もうという研究が現れ始めた。これらの進歩的研究は主として社会心理学的洞察を基盤に行われており、発話スタイルの新定義や言語変異におけるスタイルの役割についての理論化を試みている。また、会話参与者間の社会心理や聴衆構成、さらには話者が行う能動的自己確認 (self-identification) や自己遂行 (performativity) などに重きを置く理論的展開を背景に、分析資料に関する方法論的進化も注目に値する。従来のスタイル分析では常道であったインタビュー

などの人工的言語運用場面から収集された談話を資料として用いるのではなく、言語共同体内の日常生活場面から得られた自然発生的談話を分析することが、スタイルの実像へ迫る得策と考えられ採用されつつある。

聴き手という存在が話者の発話に与えるインパクトをその中核に据えるオーディエンス・デザイン理論 (Bell, 1984) において、スタイルとは、聴衆構成、聴き手との力関係、親疎、連帯など様々な社会心理的要因に合わせて、話者が個人内で能動的に行う収束あるいは分岐的発話調整であると言える (Giles & Coupland, 1991)。さらには、目の前に存在する聴き手ばかりが発話調整の対象ではなく、地域社会の言語規範や言語イデオロギーに反応するかたちで話者自らが率先してスタイル調整をする行為も含まれる (Bell, 2001)。このような意味で、発話タスクや話題の堅苦しさの程度に反応する「発話への意識レベル」という従来の一元的定義よりは、複合的かつ動的な概念として発話スタイルが捉えられ始めたと言える。

こうした社会心理的アプローチを採用することで、よりの確にスタイルの動的実像を捉え言語変異メカニズムの説明に役立てた研究がある。アフリカ系アメリカ人女性 Foxy の日常語を対象に Rickford & McNair-Knox (1994) は、二人の異なるインタビューアとの会話に観察される規則的変異に注目した。一名は Foxy と民族性を共有する対話者であり、もう一名はヨーロッパ系アメリカ人 (白人) の対話者であった。分析の結果、Foxy の日常語は、インタビュー内で行われた様々な話題の調整に対してよりも、対話者の民族性との一致・不一致に敏感に反応する秩序を内包しており、特に会話参与者間での民族性が一致する環境において、Foxy は対話者の発話に対する収束応化 (convergent accommodation) を無意識的に行い、アフリカ系アメリカ人英語に典型的な文法特徴を多用すること

が分かった。

このような社会心理学的知見を応用した日本語への変異理論的アプローチも存在する。Takano (1998) では、日本語の格助詞「は」「が」消去が女性話者特有の変項であるとする Shibamoto (1985, 1990) の研究成果に対し、会話参与の性別構成 (同性間会話対異性間会話) という視点から再検証を加えている。その結果、当該変項の女性話者との相関は、同性間会話、即ち、性社会集団が独立的かつ最も均質的に存在している場面においてのみ顕著に観察できる変異であり、二つの異なる性社会集団が交錯する異性間会話などの会話参与形態においては、男女差はほとんど観察されなかった。この結果を Takano は、二つの性社会集団間 (親しい友人同士の異性間会話) で無意識的に生じている心理的収束応化の顕れと解釈し、男性話者は女性話者の消去率へ、女性話者は男性話者の消去率への互恵的歩み寄りの結果生じた中立的スタイルであるとした。こうした研究成果は、実生活の会話参与形態では当たり前になりうる異種社会集団との接触に反応する能動的スタイル変異を、社会心理的動機に基づいて説明するだけでなく、「性」という話者属性をより臨機応変な動的変数として捉えることの重要性も改めて示唆したと言える。

一方、発話応化 (speech accommodation) によるスタイル変異において、一対一の対話における聴き手への収束的応化だけがその起因となるわけではない。多民族がひしめく言語共同体 (イスラエル社会) における「民族的活力」(ethnolinguistic vitality) をスタイル変異の起因として扱った Yaeger-Dror (1988, 1991, 1993) の一連の研究では、アラブ系ルーツを持つポップ歌手が、聴き手の民族的ルーツとの整合性と自己の民族的アイデンティティへの忠誠という二つの社会心理的動機によって、収束かつ分岐的応化の両面を同時に兼ね備えた複合的スタイル変異を無意識的に秩序

化していることが明らかとなった。多数派である非アラブ系イスラエル人を聴衆とする歌唱レジスターでは、当該共同体では規範的な(r)異音を採用し(即ち、外集団への収束的応化と内集団へ分岐的応化)、ラジオ番組のインタビュー場面では自己の民族的アイデンティティーへの収束的応化(と同時に外集団への分岐的応化)として別の(r)異音を無意識的に採用している事例を報告している。即ち、一人の話者が見せるスタイル変異は、所属する地域社会のマクロ的政治文化的状況に敏感に反応し、そのメカニズムは当該言語共同体内に存在する複数の自然発生的レジスターを分析することにより初めて明らかとなったわけである。

発話スタイルのこうした自立性・発信性を重要視するスタンスで、Coupland (2001) は発話スタイルが有する能動的特性を詳細に分析している。発話スタイルの変異は極めて方略的であり、会話脈絡に応じて話者個々人は多彩な「顔」(persona)を喚起させ、その会話にある特定の社会的意味・効果を創り上げる。同一の会話参与者間での会話の流れにおいても、スタイル変異はその会話内容や背景知識などといった脈絡的要素と相互的に作用し、相互行為の各局面ごとに様々な社会的意味を投影する表現手段として積極的に活用される。従って、発話スタイルの真の理解やその変異の起因解釈には、「堅苦しき」や「カジュアルさ」といった発話状況(あるいはタスク)からの一方的制約では不十分であり、話者とその会話を社会的営みとしてどのように捉え、いかなる会話参与者間関係を築こうとしているのかという話者固有の「働きかけ」(speaker agency)を重んじる視点が不可欠とされる。

前節からの議論から明らかなように、変異理論的アプローチの進化のなかで、言語能力の可変性を統括する言語外的変数(社会的変数・スタイル的変数)の説明が、現実の社会

生活で話者個々人が行う具体的社会实践や会話という社会的営みにおける参与者間の社会心理の動きを主な拠り所とする方向付けを得たとするならば、言語共同体成員の日常生活における自然発生的談話を積極的に活用していく方法論的展開は、極めて自然な成り行きであろう。その場合に、意思伝達手段としての言語を使いこなす人間の言語能力の解明という言語理論本来の目標は、その自然発生的談話を取り巻く脈絡的要因(contextual factors)のより深い洞察を抜きには達成し得ないこともまた明らかである。

このような動きを受け、発話スタイルの概念に新次元を付け加える変異理論的研究が近年芽生え始めている。会話分析学派(Sacks, 1992)が明らかにしてきた会話行動の普遍的法則性を後盾に、例えばYaeger-Dror (1996, 1997, 2001)は、アメリカ英語における韻律的変異が普遍的な相互行為的意味(interactive meanings)によって秩序立てられていることを示した(Goffman, 1978)。否定語「not」に与えられる韻律強調の変異において、会話相手の面子を保全する否定なのか⁽⁵⁾、直接的に相手の面子を傷つける否定なのか、⁽⁶⁾などの会話脈絡から決定される相互行為的意味を話者は瞬時に判断し、会話行動における普遍の原則である「合意」(agreement)へ向け極めて規則的に韻律を使い分けていることが明らかとなった。韻律変異の説明におけるこのような脈絡的情報の有効性は、他の言語を扱った変異理論的研究においても経験的に立証されている(フランス語 [Yaeger-Dror, 2002], 日本語 [Takano, 2002], スペイン語 [Takano & Yaeger-Dror, 2002])。

以上、言語外的変数を巡る近年の研究成果から導かれる今後の理論的展開の焦点は、社会的変数・発話スタイルの両拘束要因を貫く「動的」「実践的」特性の定義・理論化であろう。古典的研究では常道とされた「静的」尺度から脱却し、日常の社会实践の中で様々な

構築される「複合可変的」「動的」変数として言語外的変数全般を捉え直そうというスタンスは、将来的には社会的変数と発話スタイルとの境界を取り去り、両者を例えば「社会構築変数」などという同一線上に位置づけるような理論的進化に繋がっていく可能性がある (Eckert & Rickford, 2001)。

5. おわりに

言語とは何かという問いかけに対し、言語を自然なありのままの姿で捉えるアプローチを選択する我々社会言語学者は、皆必然的に多くの関係因子を抱え込みながらその「変異」と向き合わねばならない。言語変異理論は、言語学の歴史において、初めてこうした言語の本性を理論化する試みに着手し、現在もなお進化し続けている言語理論である。本論考は、理論内容の一面的解釈から派生すると思われる「関連主義的」なる偏見を払拭すべく、特に「説明・予測」能力に焦点を当てた当該理論の再考察を試みた。論考の前半では、「言語能力の解明」という言語変異理論の学術的ゴールを確認した上で、当該理論の理論的枠組み、および変異理論的アプローチの妥当性を裏付ける分析ツールの有効性やこれまでの重要な研究成果を詳述した。論考の後半では、特に「関連主義的」という誤解の主な原因と思われる「言語外的変数」(話者属性・発話スタイル)の扱いや解釈を巡る近年の進歩的展開を中心に、現在もなお進化し続けている言語変異理論の全体像および今後の方向性を考察した。

言語のありのままの現実を忠実に捉えようとする包括的アプローチには、下手をすると事の核心と周辺との見分けがつかず、結局は真相に迫れないという落とし穴があるのも事実である。「理論不在の社会言語学」という苦言は、言語の真相を見極める案内役としての理論の未成熟を指摘するものであろう。し

かし一方で、包括的アプローチの醍醐味は、言語を生きた媒体として捉えることにより、その背景にある話者・社会・文化の意味がより鮮明に見えてくることではないだろうか。その醍醐味を共有する我々社会言語学者は、社会言語学における理論とは何か、という問いかけを常に行いながら、より優れた社会言語学理論の発展に向け、既存理論の比較・検討の場を積極的に設けていくべきであると考ええる。

[注]

- (1) 本論考は、科学研究費補助金基盤研究(B)(1)『日本語諸方言に見られる中間言語的変異の研究～言語変異理論の立場から～』(平成13～15年度 研究代表者: 鹿児島大学 太田一郎)の助成による研究成果と社会言語学会第13回大会ワークショップ『変異理論は相關主義的か?～言語変異理論の新たな展開』(2004年3月28日於東京工芸大学)における研究発表に基づいている。
- (2) 「社会言語学的性差パターン」はすでに威信形または汚辱形として一定の社会的評価を与えられている比較的安定した変項に限って妥当だとする再解釈がその後なされている (Chambers & Trudgill, 1980; Labov, 1981)。また、著しい社会的変動のある言語共同体における急激な言語変化や言語共同体成員の意識のレベルにまだ届いていない変項 (change from below) などについては、当該パターンは適応しない (Labov, 1990; Chambers, 1995)。さらには、西欧資本主義社会とは文化・社会構造の著しく異なる言語共同体における反証も報告されている (Keenan, 1974; Labov, 1990; Kulick, 1992)。
- (3) ある言語共同体の社会政治的状況を背景に、成員個々人がその地域社会で培う「社会的アイデンティティー」を社会的変数として言語変異・変化の社会的動機を説明しようとする試みは、変異理論の古典的研究においても見

られる。Labov (1963) は、米国東部の避暑地として有名なマサチューセッツ州のバーミンガム島で当時進行中であった「土着語志向」の母音変化を研究し、避暑を求めて本土から押し寄せ、島の生活を脅かす本土人々への敵意から、島民が「島民らしさ」を主張する術として当該変化を無意識的に推し進めていることを経験的に明らかにした。

- (4) 近年、Labov (2001) によって提唱された「スタイル決定木」(style decision tree) から察するに、この解釈は今日でもそれほど大きな変革の手は加えられていないが、強いて言うならば「観察者の逆説」(observer's paradox) を克服する手段としての様々な話題調整を「Casual-Careful」という従来の一元的尺度に統合したという変更点は見取れる。
- (5) 例えば、友人同士の会話で、友人 A の発話「I've gained a lot of weight these days.」に対し、友人 B が「No, you are not fat!」などと相手を擁護する発話をする。
- (6) 例えば、上司 A とアルバイト B の会話で、上司 A の発話「I heard you came late again this morning.」に対し、参加者 B が「That's not true!」などと相手の発話を真っ向から否定する発話をする。

[引証文献]

- Bell, A. (1984). Language style as audience design. *Language in Society*, 13:145-204.
- _____. (2001). Back in style: reworking audience design. In P. Eckert & J. Rickford (eds.), *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 139-169.
- Biber, D., & Finegan, E. (eds.) (1994). *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press.
- Bickerton, D. (1971). Inherent variability and variable rules. *Foundations of Language*, 7:457-492.
- Bortoni-Ricardo, S. M. (1985). *The Urbanization of Rural Dialect Speakers: A Sociolinguistic Study in Brazil*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, D. (1985). *Feminism and Linguistic Theory*. London: Macmillan.
- Cedergren, H. J., & Sankoff, D. (1974). Variable rules: performance as a statistical reflection of competence. *Language*, 50:333-355.
- Chambers, J. K. (1995). *Sociolinguistic Theory*. Oxford: Blackwell.
- Chambers, J. K., & Trudgill, P. (1980). *Dialectology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Coates, J., & Cameron, D. (eds.) (1988). *Women in Their Speech Communities*. London: Longman.
- Coupland, N. (1983). Patterns of encounter management: further arguments for discourse variables. *Language in Society*, 6(3):313-322.
- _____. (2001). Language, situation, and the relational self: theorizing dialect-style in sociolinguistics. In P. Eckert & J. Rickford (eds.), *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 185-210.
- Delphy, C. (1981). Women in stratification studies. In H. Roberts (ed.), *Doing Feminist Research*. London: Routledge & Kegan Paul. Pp.114-128.
- Douglas-Cowie, E. (1978). Linguistic code-switching in a Northern Irish village: social interaction and social ambition. In P. Trudgill (ed.), *Sociolinguistic Patterns in British English*. London: Edward Arnold. Pp. 37-51.
- Eckert, P. (1988). Adolescent social structure and the spread of linguistic change. *Language in Society*, 17:183-207.
- _____. (1989). The whole woman: sex and gender differences in variation. *Language Variation and Change*, 1:245-267.
- _____. (1991). Social polarization and the choice of linguistic variants. In P. Eckert (ed.), *New Ways of Analyzing Sound Change*. New York: Academic Press. Pp. 213-232.

- _____. (2000). *Linguistic Variation as Social Practice*. Malden, MA: Blackwell.
- Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1992). Think practically and look locally: language and gender as community-based practice. *Annual Reviews of Anthropology*, 21:461-490.
- Eckert, P., & Rickford, J. (eds.) (2001). *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fasold, R. (1990). *Sociolinguistics of Language*. Cambridge, MA: Basil Blackwell.
- Giles, H., & Coupland, N. (1991). *Language: Contexts and Consequences*. Buckingham: Open University Press.
- Goffman, E. (1978). *Forms of Talk*. Oxford, MA: Blackwell.
- Graddol, D., & Swann, J. (1989). *Gender Voices*. Oxford: Blackwell.
- Guy, G. (1975). Use and applications of the Cedergren-Sankoff variable rule program. In R. Fasold & R. Shuy (eds.), *Analyzing Variation in Language*. Washington, D.C.: Georgetown University Press. Pp.59-69.
- _____. (1980). Variation in the group and the individual: the case of final stop deletion. In W. Labov (ed.), *Locating Language in the Time and Space*. New York: Academic Press. Pp. 1-36.
- _____. (1981). *Linguistic Variation in Brazilian Portuguese: Aspects of the Phonology, Syntax, and Language History*. Unpublished Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania.
- _____. (1987). Advanced varbrul analysis. In *Linguistic Change and Contact: Proceedings of the 16th Annual Conference on New Ways of Analyzing Variation*. Austin, TX. Pp. 124-136.
- _____. (1991). Explanation in variable phonology: an exponential model of morphological constraints. *Language Variation and Change*, 3:1-22.
- Guy, G. R., & Boberg, C. (1997). Inherent variability and obligatory contour principle. *Language Variation and Change*, 9:149-164.
- Hibiya, J. (1988). *A Quantitative Study of Tokyo Japanese*. Unpublished Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania.
- Hymes, D. (1974). *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Keenan, E. (1974). Norm-makers, norm-breakers: uses of speech by men and women in a Malagasy community. In R. Bauman & J. Sherzer (eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 125-143.
- Kroch, A., & Small, C. (1978). Grammatical ideology and its effect on speech. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. Pp. 45-55.
- Kulick, D. (1992). Anger, gender, language shift and the politics of revelation in a Papua New Guinean village. *Pragmatics*, 2(3):281-296.
- Labov, W. (1963). The social motivation of a sound change. *Word*, 19:273-309.
- _____. (1966). *The Social Stratification of English in New York City*. Arlington, VA: Center for Applied Linguistics.
- _____. (1969). Contraction, deletion and inherent variability of the English copula. *Language*, 45(4):715-62.
- _____. (1972a). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- _____. (1972b). Some principles of linguistic methodology. *Language in Society*, 1:97-120.
- _____. (1981). What can be learned about change in progress from synchronic description? In D. Sankoff & H. Cedergren (eds.), *Variation Omnibus*. Edmonton, AL: Linguistic Research. Pp. 177-199.
- _____. (1990). The intersection of sex and social class in the course of linguistic change. *Language Variation and Change*, 2:205-254.

- _____. (2001). The anatomy of style-shifting. In P. Eckert & J. Rickford (eds.), *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 85-108.
- Llewellyn, C. (1981). Occupational mobility and the use of the comparative method. In H. Roberts (ed.), *Doing Feminist Research*. London: Routledge & Kegan Paul. Pp.129-158.
- Milroy, L. (1980). *Language and Social Networks*. Cambridge, MA: Blackwell.
- _____. (1987). *Observing and Analyzing Natural Language: A Critical Account of Linguistic Method*. New York: Blackwell.
- Milroy, L., & Milroy, J. (1985). Linguistic change, social network and speaker innovation. *Journal of Linguistics*, 21:339-384.
- Nichols, P. C. (1980). Women in their speech communities. In S. McConnell-Ginet et al. (eds.), *Women and Language in Literature and Society*. New York: Praeger. Pp. 140-149.
- _____. (1983). Linguistic options and choices for Black women in the rural South. In B. Thorne, C. Kramarae & N. Henley (eds.), *Language, Gender, and Society*. Rowley, MA: Newbury House. Pp. 54-68.
- _____. (1984). Networks and hierarchies: language and social stratification. In C. Kramarae et al. (eds.), *Language and Power*. Beverly Hills, CA: Sage. Pp. 23-42.
- Pintzuk, S. (1988). VARBRUL Programs [Computer program]. Philadelphia: University of Pennsylvania Department of Linguistics.
- Preston, D. R. (1989). *Sociolinguistics and Second Language Acquisition*. New York: Basil Blackwell.
- _____. (1991). Sorting out the variables in sociolinguistic theory. *American Speech*, 66:33-56.
- Rand, D., & Sankoff, D. (1990). GoldVarb Version 2: A Variable Rule Application for the Macintosh. Centre de recherches mathematiques. Universite de Montreal.
- Rickford, J. (1986). The need for new approaches to social class analysis in sociolinguistics. *Language and Communication*, 6(3):215-212.
- Rickford, J., & McNair-Knox, F. (1994). Addressee- and topic-influenced style shift: a quantitative sociolinguistic study. In D. Biber & E. Finegan (eds.), *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press. Pp. 235-276.
- Rousseau, P. (1989). A versatile program for the analysis of sociolinguistic data. In R. Fasold & D. Schiffrin (eds.), *Language Change and Variation*. Philadelphia: John Benjamins. Pp. 395-409.
- Rousseau, P., & Sankoff, D. (1978a). Advances in variable rule methodology. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. Pp. 57-69.
- _____. (1978b). A solution to the problem of grouping speakers. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. Pp. 97-117.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation*. Oxford, MA: Blackwell.
- Sankoff, D. (1985). Statistics in linguistics. In *Encyclopedia of Statistical Sciences*. New York: Wiley. Pp. 74-81.
- _____. (1986). Variable rules. In U. Ammon, N. Dittmar, and K. J. Mattheier (eds.), *Sociolinguistics: An International Handbook of Statistical Sciences*. New York: de Gruyter.
- _____. (1988). Sociolinguistics and syntactic variation. In F.J. Newmeyer (ed.), *Linguistics: The Cambridge Survey*, vol. 4: *The Socio-Cultural Context*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 140-161.
- Sankoff, D., Cedergren, H. J., Kemp, W., Thibault, P., & Vincent, D. (1989). Montreal French: language, class, and ideology. In R. Fasold & D. Schiffrin (eds.), *Language Change and Variation*.

- Philadelphia: John Benjamins. Pp. 107-118.
- Sankoff, D., & Laberge, S. (1978). The linguistic market and the statistical explanation of variability. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. Pp. 239-250.
- Sankoff, D., & Labov, W. (1979). On the uses of variable rules. *Language in Society*, 8:189-222.
- Shibamoto, J. S. (1985). *Japanese Women's Language*. New York: Academic Press.
- _____. (1990). Sex-related variation in the ellipsis of wa and ga. In S. Ide & N. H. McGloin (eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kuroshio. Pp. 81-104.
- 渋谷勝巳 (2002)「方言学の功罪」,『21世紀の方言学』, 国書刊行会
- Takano, S. (1998). A quantitative analysis of gender differences in the ellipsis of the Japanese postpositional particles -wa and -ga: gender composition as a constraint on variability. *Language Variation and Change*, 10:289-323.
- _____. (2000). The myth of a homogeneous speech community: A sociolinguistic study of the speech of Japanese women in diverse gender roles. *International Journal of the Sociology of Language*, 146:43-85.
- _____. (2002). A variationist study of prosodic focus in naturally occurring interactions: the case of the negative "-nai" in Hokkaido Japanese. *音声研究* 6 卷 3 号, 25~47頁
- Takano, S., & Yaeger-Dror, M. (2002). Identifying register and speaker stance from prosodic strategies: a comparison of Japanese and English corpora. Paper presented at the 31st New Ways of Analyzing Variation Conference, Stanford University.
- Thomas, B. (1988). Differences of sex and sects: linguistic variation and social networks in a Welsh mining village. In J. Coates & D. Cameron (eds.), *Women in Their Speech Communities*. London: Longman. Pp. 51-60.
- Trudgill, P. (1974). *The Social Stratification of English in Norwich*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Weinreich, U., Labov, W., & Herzog, M. I. (1968). Empirical foundations for a theory of language change. In W. P. Lehmann and Y. Malkiel (eds.), *Directions for Historical Linguistics*. Austin, TX: University of Texas Press. Pp. 95-188.
- Wolfram, W., & Fasold, R. W. (1974). *The Study of Social Dialects in American English*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Wolfson, N., Marmor, T., & Jones, S. (1989). Problems in the comparison of speech acts across cultures. In S. Blum-Kulka, J. House and G. Kasper (eds.), *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex. Pp. 174-196.
- Yaeger-Dror, M. (1988). The influence of changing group vitality on convergence toward a dominant linguistic norm: an Israeli example. *Language & Communication*, 8(3/4):285-305.
- _____. (1991). Linguistic evidence for social psychological attitudes: hyperaccommodation of (r) by singers from a Mizrahi background. *Language & Communication*, 11(4):309-331.
- _____. (1993). Linguistic analysis of dialect "correction" and its interaction with cognitive salience. *Language Variation and Change*, 5(2):189-224.
- _____. (1996). Register as a variable in prosodic analysis. *Speech Communication*, 19:39-60.
- _____. (1997). Contraction of negatives as evidence of variation in register specific interactive rules. *Language Variation and Change*, 9:1-38.
- _____. (2001). Primitives of a possible system for 'style' and 'register.' In P. Eckert & J. Rickford (eds.), *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 166-180.

_____. (2002). Register and prosodic variation, a cross language comparison. *Journal of Pragmatics*, 24:1495-1536.

Young, R., & Bayley, R. (1996). VARBRUL analysis for second language acquisition research. In R. Bayley & D. R. Preston (eds.), *Second Language Acquisition and Linguistic Variation*. Philadelphia: John Benjamins. Pp. 253-306.

[Abstract]

Reconsideration of the Variation Theory: Misconception of "Correlationism" and the Issue of Explanatory Power

Shoji TAKANO

The present paper aims to re-examine the architecture of the "Variation Theory" (Labov, 1972), the pivotal theory of modern sociolinguistics. In response to a widespread misconception that variationist linguistics merely pursues as its goal systematic correlations between variable linguistic behaviors and the speaker's social attributes (e.g., social class membership, gender, ethnicity, etc.), this paper first shows that the theory originates in formal attempts to integrate variable and transitional properties of language into grammars (or the native speaker's linguistic competence) shared in the speech community. Investigation of correlations is thus part of the discovery procedures rather than the goal. Furthermore, this paper shows how the recent development of variationist linguistics has succeeded in taking advantage of a highly sophisticated statistical program (VARBRUL) as a heuristic tool in order to predict systematic variability in speech community grammars. Finally, this paper demonstrates that recent research outcomes and serious discussions on the constructive meanings of social variables, contexts of use, and conceptions of styles and registers have all contributed to "explaining" why certain patterns of linguistic variation are manifested and why linguistic changes are activated in certain directions.